C. 納得する、表現する

C-1.ダイコンを育てよう！
神戸市立奥の池幼稚園（兵庫県神戸市）　［4～5歳児］

【事例１】
「なぞが解けたわ。あれはすごい元気な雑草や」
＜畑の準備＞

二学期に入り、畑の様子を見に行った４歳児の子どもたちが「先生、大変や！またジャガイモができてる！」と報告に来る。それを聞いていた５歳児が「また、カレーパーティーができるやん」「でも、あの時みんな取ったはずやのになあ」と大騒ぎになる。畑は園から５分ほど離れていて、近隣の小・中・養護学校の菜園と共にある。「小学校のお兄さんの畑と見間違ったのとちがう？」という意見もあり、降園後、畑を通って帰る子どもたちが確かめることになる。

翌朝、**「先生、謎が解けたわ。あれはすごーい元気な雑草や」**という話を聞いて、保育者が「ほんと？今度ダイコン作るのに…困ったな」と言うと、「ダイコンの種、何処に蒔いたらええのか分からへんもんね」「頑張って雑草ぬきに行こう。４歳さんも連れていってあげようよ」という話になる。

そこで、各クラスで雑草のことを話し、興味の薄い子どもも、畑に目が向くような期間をとった。

保護者に子どもの今の興味を伝えて協力を得、登降園時や散歩の時など家庭でも意識できるようにした。

数日後、畑に行って雑草を抜く。ひげのような根っこ、ずっとずっと地面の中まで伸びる一本根っこ、どうしてもポキポキ茎の所で折れる回避能力の高い根っこなどに気付く。「ほんまになかなか抜けへん」「この根っこ、強すぎー」「土の中に立つ足みたいや」と話す子どもたちに、保育者が「足の役目だけと違うのよ。いっぱい水や土の中のエネルギー貰うの」と言う。子どもたちは「そーか。ストローみたいやね」と言い、それからは抜いて出てくる根っこの形状に興味をもつ子どもが増え、長さを比べたり、葉っぱの形から根っこの種類を当てたりする子どもも出てくる。

【事例２】
「分かったわ。だからダイコン切っても種がでてこないんやなあ」
＜ダイコンの種まき＞

子どもたちと種との出会いを大切にしたいと思い、あえて目をつぶらせて手のひらに乗せるようにする。

手のひらに乗せられても、あまりの小ささに感触がないらしく、「先生、まだ貰ってないよ」と叫ぶ子どもがいる。そして目を開けると、「どうして赤や茶色なの？」（ダイコンは白色なので種も白いと思っていたのか？）「ゴマみたいや」「なんで、こんな小さな種があんな大きいダイコンになるの？」「種のどこにダイコン入っているんやろ？」という衝撃の言葉が次々と出る。
（種採りに夢中になっている５歳児にとっては自分の知っている他の種との落差は大きいようだ。）

そして、ダイコンの何処にこの種が入っているのかが話題となる。「ヒマワリはお花の中に種あるよ」「ホウセンカも花の後にできたパチンボールに入ってた」「アサガオもお花のお汁取った後の所が変身してた」毎日の種採りでこんなに多くの自然の発見をしていた。「そうだね。ダイコンも花が咲くんだよ」と保育者が言うと「へえ、そしたらそこに種できるの？」「そうよ。すごいよね」**「僕、分かったわ。だからダイコン切っても、種がでてこないんやなあ」と言う。**マーケットや八百屋さんに並ぶダイコンからしかイメージできなかった子どもたちだが、毎日の自然体験の中から少しずつダイコンの生育にも興味とイメージが広がっていき始めた。明日を楽しみにし、種を回収する。

翌朝、畑に出かけた。４歳児は「ダイコンの種まき」と分かって楽しみに出かけたはずなのだが、畑に着くと、大きく生育したダイコンをどこかのスーパーで買ってきて植えると思っていたり、畑のどこかに隠れているダイコンを掘り出すと思っていたりする子どもが多い。（改めて５歳児との理解力の積み重ねの違いを感じた。）

日に日にダイコンの生長に興味をもつ子どもが増える。また、その生長や変化が知りたい子どもも多くなる。雨が降らず、心配な日が続く。運動会も近いのに、てるてる坊主を作り、逆さに吊るす子ども、登降園時にそっと保護者と畑に行って水をやる子ども、その生長の様子をクラスの「ニュースの時間」に詳しく報告する子どももでてくる。

【事例３】
「ダイコンは雨の水が一番好きなんだよね」
＜再びダイコンの種をまく＞

晴天の日が続く。「先生、ペットボトルに水入れて畑に行こう」と５歳児たちが言い始める。園児全員が自分の持てる量の入れ物を選び、水を運ぶことになる。４歳児は砂場から大きなバケツを取ってくる。満タンに水を入れ、持ってから初めて「重たい！！持てないよ」と泣く。５歳児がその様子を見ていて水の量を少しずつ減らし、その都度４歳児にバケツを持たせ確認している。ペットボトルでは２ℓ入りは５歳児が持ち、４歳児に500 ml を渡す姿も見られる。

畑に着くとダイコンの若葉は瀕死の状態で、雑草は生き生きしている。さっそく４歳児は生き生きとした雑草の、それも葉っぱの部分に水を撒いている。「あかん！あかん！雑草にお水あげたらダイコンの分、なくなるやん」と５歳児のストップの言葉でキョロキョロと見回し「じゃあ

ダイコン、どれよ？」と騒ぎ始める。「ダイコン、どこにもおれへん」（白いダイコンをもう想像しているのか）保育者が「みんな、ダイコンの葉っぱみたことなーい？」「八百屋さんで見たことないかな？」と4歳児に尋ねてみる。昨年度、経験している5歳児が「これやと思う」指さして見せる。そこここで5歳児が4歳児にダイコンの葉を指さし教えている。4月に園庭の花に水をあげた時同様に懸命に花に水をかけ、花弁が折れたりしたことを思い出し、土の部分に水をあげる姿や、萎れかけの小さな若葉に水をかけ「なんか、もっとしんどそうになっちゃった」と嘆き、水のやり方を周りの5歳児や保育者に教えてもらう4歳児の姿が多い。

その後も晴天が続き、水を運ぶ日が続いたが、とうとうダイコンは枯れてしまう。

みんなで話し合い、再び種まきをする。

ダイコンが枯れたことは5歳児には相当なショックだった。週末の休みの間も観察する子どもや親子で水やりにいく子どもたちも出てきはじめる。

暫くして久しぶりに雨が降る。「わあ、大きいお父さん粒も赤ちゃん粒もある」

「先生、この雨、ダイコンの畑にも降っているよね？」

「私、今度の水やりにこの水、持っていってあげるわ」

「ダイコンは雨の水が一番好きなんだよね」と言いつつ、プリンカップで受けている。

こうして、雨が降ると工夫して雨を集め、ダイコンにあげるようになる。たくさん集めるために様々に工夫する5歳児や、その様子に興味をもつ4歳児の姿が見られる。

【事例4】
「もったいないやんか。ウサギのおみやげにしよう」
＜ダイコンの間引き＞

雑草抜きの時に、ポツンと離れた所に大きく育ち、土から白い顔を出しているダイコンを見つける。「もう、顔出してる」「なんでこの場所のダイコンはこんなに大きいのかしら？」「こんな端っこにお水、私あげてないのになぁ」「広いから大きくなりやすいん？」「でも寂しそうやな」とやりとりが聞かれた。保育者が「どう？仲良しでいっぱい生えているダイコンは大きくなっているか、一本抜いてみようか？」と働きかける。

ヨレヨレの根っこに毛の生えたようなダイコンが出てくる。「わぁ、根っこしかない。ダイコンいない」と放り投げる。**「もったいないやんか。ウサギのおみやげにしよう」**と手にしたとたん、「これ、ダイコンとちがう？」「ほんまや、かわいそうなダイコンや」「じゃあ、ダイコンって根っこなん？」と大発見を喜ぶ。広いところに植え直そうとして、周囲を探すが中々空いている場所がない。（少しずつダイコンを抜いたが、やっとここまで育てた子どもたちにとっては抜くには忍びないのか、消極的な活動になった。）

絵本「おおきなかぶ」を楽しんだ4歳児は、「もっと待っていたらもっと大きくなる」と、5歳児に申告した。ところが、一番大きかったダイコンがなくなったことをきっかけに、5歳児では「盗られたんや」「せっかく大きしたのに…」「スーパーに行くのが遠かったんかなぁ？」「立て札作ろう！」「盗らないでって書こう」と、早速看板を立てたが、ダイコンがなくなる日が続き、「先生、もうダイコン抜きしよう」「はよ、幼稚園に連れて帰って来よう」「そうや。それで安心や」と話し合った。もっと長く土の中で大きくしたいと思っていた4歳児たちには不本意だったが、大きなダイコンが無くなっていることを5歳児に説得され、収穫することになった。こうして大切に育てられたダイコンは12月に収穫を楽しむことができた。

考察

子どものさりげないつぶやきや行動の理解など、共感するところや受け止め方が、より新鮮に捉えられた。子どものものの見方や思考をつかみ、その心に添い実現させていくという道筋が見えてきた時、活動そのものが変わって見えた。1回目のダイコンの全滅も、子どもたちにとって自然を育てる気持ち、意欲に大きな拍車をかけたように思う。

子どもたちと日々の活動が、スムーズに展開できるよう保育者がお膳立てをするばかりでなく、失敗や困難に出合った時に、そこで子どもが感じたことや気付いたことに共感し、共に考えたり、次への試しができるよう意欲を支えたりできる保育者でありたい。

ポイント

収穫後の何もないはずの畑に、4歳児が「ジャガイモが出てる」と言った謎を確かめ、ダイコンの種の不思議を考えて期待して種まきをしたことで、日照りの水不足によるダイコンへの思いが膨らんでいます。枯れてしまうという事実も受け止めて「ダイコンは雨水が大好きなんだ」という発想をし、雨水集めが展開します。「大きく育つダイコン」を考えることで、間引く必要性やダイコンは根っこだということに気付き、「ダイコンをウサギの餌にする」ということで、納得して大事なダイコンを間引いています。

幼児なりに疑問や考えを確かめて納得し、その思いを言葉に表して伝えることで、友達と共有し協同で活動を進めています。